

戦争文学通信

高崎隆治著

〔著者紹介〕

高崎隆治

1925年生まれる

法政大学予科を経て文学部国文科卒

在学中に学徒兵として戦争を体験

1948年より高校教師

1975年教師生活を去り文筆に専念

新日本文学会々員

著 書

「無名兵士の詩集」(太平出版社)

「戦争文学文献解題」(戦争文学研究会)

「ペンと戦争」(成甲書房)

「戦時下の雑誌 その光と影」(風媒社) 他

現住所

横浜市戸塚区吉田町1070

戦争文学通信

1975年12月 8 日 第 1 刷発行

1977年 4 月15日 第 2 刷発行

著 者 高 崎 隆 治

発行者 稲 垣 喜 代 志

発行所

名古屋市中区上前津2-9-14 久野ビル

電話052-331-0008 振替・名古屋5616

風媒社

＊乱丁・落丁本はお取り替えます。

＊日大印刷＊中部製本

1091-2007-7302

■装幀 中矢恵子



高崎隆治著

戦争文學通信

風媒社

目 次

第一部 戦争文学通信

71年

- NO・1(2・15)私の意図 8 NO・2(3・15)佐多稻子と戦争(上) 12
 NO・3(4・15)佐多稻子と戦争(下) 16 NO・4(5・15)脱走兵里村欣三
 (上) 24 NO・5(6・15)脱走兵里村欣三(中) 32 NO・6(7・15)脱走兵里
 村欣三(下) 39 NO・7(8・15)脱走兵里村欣三(完) 47 NO・8(9・15)戦
 争詩特集 55

72年

- NO・9(11・1)「南京大虐殺」は戦争下、に書かれていた 64 NO・10(12・1)
 発禁の戦争小説『火線』について 72

73年

- NO・11(1・1)『宣戦の大詔』考 80 NO・12(2・1)長春一九三一・九・一
 八(上) 88 NO・13(3・1)長春一九三一・九・一八(下) 96 NO・14(4・
 1)南京秘密警察 104 NO・15(5・1)江木真美子の作文 112 NO・16(7・1)
 徴発(掠奪)考 120 NO・17(8・1)壮丁の思想 128 NO・18(9・1)『海外
 地邦人ノ言動ヨリ観タル国民教育資料』 136 NO・19(10・1)悪魔とその子孫 144
 NO・20(11・1)元関東軍無名兵士を悼む 152 NO・21(12・1)(続)元関東軍

兵士を悼む 160

74年

- NO・22(4・1)一經理将校の「戦場日記」について 167
年目の感想¹⁷⁴ NO・24(6・1)南京戦の周辺(上) 182 NO・23(5・1)二十
戦の周辺(下)¹⁸⁹ NO・26(8・1)「十五年戦争文献資料展」について¹⁹⁷
NO・27(9・1)学徒兵たちは知っていた²⁰⁵ NO・28(10・1)天皇への手
紙²¹³ NO・29(11・1)ある戦死者の日記²²¹ NO・30(12・1)ある戦死者の
日記(続)²²⁹

75年

- NO・31(1・1)(続)天皇への手紙²³⁷ NO・32(2・1)(続々)天皇への手
紙²⁴⁴ NO・33(3・1)天皇への手紙(第四話)²⁵² NO・34(4・1)「戦闘詳
報」²⁶⁰ NO・35(5・1)『乞食の墓』(金史良)をめぐって²⁶⁸ NO・36(6・
1)日暮れて道なお遠く²⁷⁶ NO・37(7・1)「戦病死」ということ²⁷⁹ NO・
38(8・1)戦時下の朝鮮語放送²⁸⁴ NO・39(9・1)湯浅克衛における敗戦²⁹¹
NO・40(10・1)野戦ガス中隊と戦記『山巖』²⁹⁹

第二部 戦争文学文献目録

昭和12年	330
昭和13年	337
昭和14年	345
昭和15年	349
昭和16年	325
昭和	
あとがき	351

第一部

戦争文学通信

戦争文学通信

No. 1

71. 2. 15

私の意図

高崎隆治

紙面が狭小なので、発刊の辞など書きたくないのだが、なぜこういうものを発足させなければならないのか不審の念を抱かれるむきも多いと思われるので、意図だけを簡単に述べる。

つまりそれは、十五年戦争中に書かれた戦争文学が「ゼロの文学」として切り捨てられていることに、この国の文学研究における大きな錯誤があると思うからにほかならない。もちろん、戦時下の戦争文学も、数年前、矢つぎ早やに刊行された多くの戦争手記にみられるように、その研究もかなり精力的に行なわれていることはたしかだが、それらはもっぱら未刊のもの

発掘であり、それはそれとして大いに結構なことではあるのだが、既刊の戦争文学は実は「ゼロ」などではなく、「恐怖の文学」である事実を無視することに、私は限らない不満を覚えるのである。作者たちが、自らの恥部をさらけ出すことをきらう気持はわかる。しかし、だからといって、あれはなかったことにしようなどという寛大な気持に私たちがなれるには、あまりにもほう大な作品群の質量でありすぎるのだ。

はじめ、私は、作者らを許せぬとするやみ難い感情からこの仕事に取り組んだが、十五年以上も経った今日では、そういう彼等に対する怒りよりも、むしろ、彼等と彼等の作品を許してしまっている現実こそが許せぬとする心情に変わってしまったようである。

すでに、私の手元には戦時下発行の文学作品が、単行本だけでも千冊をこえる分量として集まっている。過去十五年余の歳月は、このためにのみ消費されてしまったといっても過言でないが、今ここで収集過程の苦心談など述べてみてもはじまらないだろう。だが、

ひとことだけ言わせてもらえば、立派な学者先生や評論家がこの国にはゴマンといながら、だれ一人としてこういう基礎的な作業に全力を傾けることをせず、私のようなその日ぐらしの名もなく貧しい人間がやらなければならぬことに、文学研究の不毛を思わないわけにはいかない。

永い間、私は孤立を余儀なくされ、狂人扱いを受け、冷飯を食い続けてきた。しかし、それもはや言うまい。ただ、残り少ない時間を、最後の力をふりしぼって戦争文学を追究し、戦争を告発するためにのみ消費しようと思う。そして、やがて私の力がつき果てた時、だれかが私にかわってこの作業を継続させ、この通信を発行し続けてくれることを願う。

〈資料〉 宮本百合子の慰問文

「思ひがけぬところからおたよりを頂いて様々の感想にうたれました。御体も御丈夫といふのは何よりです。

十ヶ月のうちにも御経験は豊富であつて、永年ジャーナリストとして磨かれ来つた御眼と、今度はその一員として身にお経になる諸経験とは、必ず少なからぬ人間的収穫をもたらすであらうと存じます。何卒御自愛下さい。

私の暮しも、辛くならう筈はないといふ語呂のよい塩梅ですが、何も自分だけのことでなし、相変らずで居ります。丁度十二月下旬から正月にかけて盲腸炎の手術をして入院してゐて、あのお手紙も拝見した次第でした。この頃はもう外出もして居ります。東京は本日は雪三寸ばかり。大体平年より寒うございます。木炭が下町の一部では入手困難になつたといふ話もききます。

そちらでは本など御不自由なくおいでですか。お手のものとお申すところもありますが。うちの義弟たちも二人とも兵隊さんで一人は北の方に居ります。そちらの空は必ずしも文学的ばかりでなく思ひに上る次第です。どうぞ益々お体もお大切に御活動

のことを切願いたします。

二月十五日（註・昭和十四年）

受信者は、当時中央公論の編集者で經理將校として応召した佐藤觀次郎（戦後、社会党代議士・故人）であり、この手紙はその著書『自動車部隊』（昭15）の巻末に掲載されている。文学者やジャーナリスト等六十余名からの手紙の一つだが、宮本のものだけがきわだって立派である。

慰問文などというものは、内地の窮状を書かないのが普通であり、空疎な強がりを綴るものだが、辛いことを辛いと書き、寒いことを寒いと書く態度は型破りである。また、やや意味不明だが、戦場は「必ずしも文学的ばかりでない」と記したのも、宮本の姿勢を物語るに十分である。さらにこまかなことを言えば「お体もお大切に」と書き「お体を」でない点にも注意したい。小山いと子や矢田津世子や大谷藤子等のラブレターまがいの慰問文とくらべれば、この手紙がどれほどたしかな文章であるかよくわかると思うが、余白が

ないのでそれらは割愛する。

「死」

悲しまないぞ／悲しくはないぞ／たれが死んだって／悲しむものか／かなしんだところが悲しむだけ／むだなことだ／悲しまれるお前だって／悲しむ俺だって／早いかおそいのちがひだけで／結局は死にに來た／兵隊じゃないか／悲しみの涙なんか／ながすものか。

（中地 清・詩集『征旅転々』昭16、より転載）

〈動哨〉

「思想の科学」一月号で、上野博正という人が次のように書いている。——敗戦直後、十五歳にもなっていたとすれば、その人が天皇制を信じたことは、まったく当人の責任なのだ。天皇制とか戦争とかの猿芝居の馬鹿さ加減は、自分が自分の欲望の中でそれを誠実に追求しようとする限り、一目瞭然みとれるものである——数年前、戦無派と呼ばれる人たちが「あの頃の若者はなぜ特攻隊を拒否し

なかったのか」と難詰しているのがある雑誌で読んで、私は哑然としたが、いままた、こういう文章にゆきあたって、私はまったくガックリとせざるを得なかった。上野という人が、どういう経歴の人で何歳ぐらいの人なのか全然知らないが、無知もここまでくると、もはや滑稽を通りこして、あわれというか、無ざんというか、実際、形容の言葉に窮する。敗戦直後に十五歳といえ、十五年戦争がすでに開始された時に生まれた人間である。以後、戦争の全時期を幼年期少年期と重ねあわせてしまった子どもが、天皇制を信じたとして、なぜそれが「まったく当人の責任」になるのか。その十五年がどういう十五年であるのか上野はなんにも知らないのだ。小学校や中学で、毎日毎時間何を教えたか何を強要され何に引きずりまわされてきたか、上野はただの一ぺんでも疎開児童の記録を読んだことがあるか。バカも休み休み言うものである。上野の文章は威勢がいいことは天下一品だが、威勢がいいだけで知能が低いのは手のつけようもない。十五年

間、自由で平和な世界が続いてある日突然戦争がおっぱじまったのなら少年といえども「自分の欲望の中でそれを誠実に追求しようとする」ことも、あるいは可能であつたろう。ところが生まれた時には砲声が轟いていたのだ。童謡のかわりに「愛國行進曲」や「海ゆかば」を歌わせられたのだ。そして「欲しがりません勝つまでは」で芋をかじり、バナナやキャラメルが存在すら知らなかったのだ。なにが「誠実」なにが「追求」なにが「一目瞭然」だ。「一目瞭然」なのは上野だけで、この国の全少年少女は、その時、めくらでつんぽでおしにされていたのだ。おまけに栄養失調でヒョロヒョロし、教科書以外に読む本もなかったのだ。上野はもともとっと勉強してからもものを言うべきだ。この悲惨、この残酷がわからない奴に、平和も反戦も唱える資格はない。

戦争文学通信

No. 2

71. 3. 15

佐多稲子と戦争（上）

戦争中の佐多の作品、とりわけ戦地のルポの類を抽出して彼女を批判することに、私は一種のためらいを感じないわけにはいかない。むしろそれは戦前のプロレタリア文学運動における彼女のめざましい活動と、戦後の『灰色の午後』や『溪流』『塑像』等に見られる彼女の姿勢がそうさせるわけなのだが、しかし、本当のところは、戦争中の彼女が、これが一体、かつてのプロレタリア文学の佐多なのかと疑わせるほどに、あまりにもみじめでありすぎる変身ぶりをさらけ出していることによるのである。私には、そんな佐多がなるとも情けないのである。正視に耐えないのである。

しかも彼女は、プロレタリア作家として当然のことながら、あの戦争を「日本軍閥の侵略戦争であるということを知っていた」（『国民の歴史』昭40・2）と云うのであるからますますいけない。これではどうしようもない。佐多ともあるうものが、どうしてああいうみっともないことになってしまったのか、同じ文章で佐多は次のように述べている。

—— 私などの周囲は、赤紙一枚で昨日までの生活が破壊されて、愛し合う家族は悲しみを押えねばならなかったのである。私などは涙で、それを見おく、っているから、その外に逃げようとはおもえない。また逃げる場もなかった。女の涙で当時の空気を受けとめていたから、その外に出て自分の立場を貫こうとする確かさを失ってしまった。——

佐多稲子にして、やはり「女」であったかということに私は嘆息するのである。むしろこの「女」とは、向う三軒両隣の小母さんや若い一般の女性と同じという意味なのだが、プロレタリア作家、しかも名にしお

り佐多にして「女」をつきぬけることができなかったことに私は絶望するのだ。いや、絶望とは大げさだが、がっかりしないわけにはいかないのである。佐多に対する期待が大きすぎるといえばそれまでだが、宮本百合子のような潔癖さや、平林たい子のようなふてぶてしさを彼女が少しでも持ちあわせていたならと思うのは、やはり無理であるのだろうか。

従軍したことについて彼女はしばしば「ジャーナリズムの誘い」ということを言う。そしてそれは「ことわってことわれぬことはなかった」と、彼女自身が述べるのであれば、なぜことわらなかったのかと、はがゆさとな念をおぼえるのは、佐多の資質やその私生活を知らぬ私の勝手な心情や焦燥のあらわれであるのだろうか。事務員募集のはり紙の出ている郵便局の前を何度も行ったりきたりしながら、ついに中へ入る勇氣を持たなかったような佐多に、プロレタリア作家佐多稲子はいつ、なり下ってしまったのだろうか。『キャラメル工場』や『幹部女工の涙』を書いたころの佐多

は、いったいどこへ行ってしまったのだろうか。「ことわる」ことが作家として糧道を断たれる結果になるのなら、ペンを折って「事務員」になぜ転進しなかったのか、それをなしえなかった佐多は、もはやプロレタリア作家などではなく、見栄にこだわる小市民にしかすぎなかったのだ。運動の高揚期にだけプロレタリア作家になるのなら、佐多でなくてもだれにでも可能なことである。事実、ひところ星の数ほどいた左翼作家は、ことごとく雲散霧消して「作家」として名をとどめたのは、宮本百合子ほか数名を数えるのみである。それならば、それならばである。佐多もまた、『くれなゐ』『素足の娘』で、以後、名もない事務員になって欲しかったのだ。

人は、ひとたび「誘」われて共犯関係に陥る時、過誤は次第にエスカレートして、遂には犯罪意識すらも失うような破滅に立ちいたるもののようである。そのはじめ、「満蒙視察」に「誘」われた彼女が、つぎ

に「爆撃機に乗って杭州の基地から敵地の空へ飛んで」「たった今落された爆弾の光線の中にも鮮やかに赤々と燃えてゐる街を見おろして」くるような「前線慰問」を敢行し、三度目にはシンガポールにまで足をのばしての視察行をことわれぬまでに精神の墮落を招いてしまったことを、私は悲しみを通りこした恐怖に近い感情で考えないわけにはいかない。あだやおそろそかで体得したのではないマルクス主義が、彼女にとって歯止めの役を果さなかった真の理由は何であらうか。左翼理論は彼女にとって単なる衣裳にしかすぎなかったのだろうか。戦争が終った時、「奇妙なことに、私は自分が敗北していたとは思っていなかった」と述懐する佐多は、遂にあの戦時中、地獄の底にまで転落してしまつていたと考えるのは私一個の思いすぎではないであらう。

しかし、私はここで、佐多に対する弁護をあらかじめ封じておかなければならない。それは近ごろはやつてゐる「生活者」という言葉である。佐多といえども

「食わなければならなかった」という論理である。

私はすでに「事務員」になれと書いた。これは佐多にとって残酷な言葉ではない。なぜなら「女工」「女給」「女中」という、当時として最低の職業を転々とし、その生活の中からプロレタリア作家としての源泉を汲みあげて成長した彼女に、どのような職業にでも就き得る自信や能力がなかったとは考えられないからである。宮本百合子が女中になることは不可能であつたとしても、佐多にそれができないはずがないのである。

作家は特権者である。戦争宣伝に活用され得るという意味でもそれは十二分に特権的な職業なのだ。書かなければ食えないのはあたりまえだが、しがない事務員にまさること数倍または十数倍の糧が得られる中産階級であることはたしかなのだ。

〈動哨〉

三島の死については、多くの人々が、およそありとあらゆることを、述べたてた

が、その中で野間宏の「三島は戦争を通過していない」という主旨のものがもっとも的確な批評であった。が、一方に村上一郎のようなまったくふざけたファッショがいたことに驚きかつあきれ、ついには激しい怒りを覚えるに至ったものである。

村上は学徒出身の元海軍経理大尉なのだそうで、その時代の身分をあかす履歴書を常時ふところに行っているそうだが（『日本読書新聞』）一体どうしてそういうマネをするのだろう。元海軍大尉に、今日どれほどの、どのような意味があるのだろうか。敗戦直後、共産党員であったころの彼は、そういう経歴をおくびにも出さなかったはずだが、二転、三転、変れば変わるものである。「真剣で立合えば俺の方が勝つ」などという愚にもつかぬ対談を三島とかわしたり、今ごろ「早稲田文学」に戦時中の旧作短歌を掲載したり、村上は何を血迷っているのかまったく理解に苦しむのだ。村上がうろんな奴だとは昨年『北一輝』を書いた時すでに感じてはいたが、三島の死によって遂に踏絵

を踏んでしまったわけだ。三島が戦争を通過していないことはたしかだが、村上もまた戦争を通過してはいないのである。戦争を通過しなかったからこそ、今ごろになってその勇、その武を誇るような幼稚な愚をあえてするのだ。戦争は階級（軍隊の）の上下によってもその意味がさまざまにちがってくるようだが、元海軍大尉である島尾敏雄と村上をくらべる時、野間の言う「通過」の意味が歴然とするのである。少なくとも村上は文学者としては失格である。